

PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

安楽死

キリストを信じる兄弟姉妹へ

オーストラリア・カトリック司教会議

安楽死とは、病死ではなく、医師が患者を殺すことです。現時点では、オーストラリアには人を殺す権利を持つ医師はいません。しかし、もし我々が安楽死を受け入れれば、医師に殺人の権利を与えることとなります。

その程度には大きな段階と小さな段階がありま。もっとも大きな段階は、「誰にも殺人の権利はない」状態から「殺してもよい場合がある」状態に移行する時です。小さな段階とは、「ある人はこの人を殺す権利がある」から「その人はあの人をも殺す権利がある」に移ることで。つまり安楽死とは、人から見て死んだ方がいいと思える人全てを、殺される危険にさらすことなの

です。オランダでは、既に数年前この大きな段階を乗り越し、以後多くの小さな段階を迎え続けています。

「私たちのうちのだれも自分のために生きる者はなく、自分のために死ぬ者もない。私たちは生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ。生きるも死ぬも主のものだからである。」(ローマ人への手紙第14章7節-8節)

人間が神をもて遊ぶことなどあってはなりません。オーストラリアは、安楽死への大きな一歩を踏み出すべきではないのです。安楽死に関する論議は、感情的なものになりがちです。なぜなら、誰もが苦痛を引き延ばされることを恐れており、また他人

が苦しむのを見るのが耐えられないからです。このことが安楽死を支持する側の理論ですが、果たして安楽死が本当にこの問題に対する答えとなるのか、真剣に考えてほしいと我々は全ての人に訴えたのです。

どのような患者にも、また医師にも、生命を必要以上引き延ばす義務はありません。死に瀕している人に苦痛の多い高価で複雑な延命治療を施すべきかどうかは、医師ではなく患者本人が決めるべきことです。そのような治療を受けないことも患者の自由であり、我々はこのことについての議論が盛んになることを望みます。そうすれば患者の選択や権利に対する患者自身の意識

が高まるかも知れないからです。

また、死に瀕している人の苦痛を取り除くために、医師が認可されているあらゆる薬を使うのはもつとよいことでしょう。安楽死に賛成する人は、この分野においての現代の医薬の進歩にあまり価値を見出してはいないようです。が、緩和剤はめざましい進歩を遂げています。我々は、末期患者医療のために全力を尽くす全ての人々を賞賛します。

安楽死は、延命治療を施さないことよりさらに罪深いことです。それは直接的、計画的な殺人です。神をもて遊ぶことであり、最も危険な力を人間の手に渡すことなのです。ほとんどの医師は安楽死に反対しています。生命を助けるのが医師の仕事であって、消滅させることではないからです。安楽死が合法化されれば、耐えがたいプ

レッシュャーが医師の肩にのしかかってくるからです。

「もし一粒の麦が地に落ちて死なぬなら、ただ一つのまま残る。しかし死ねば多くの実を結ぶ。」ヨハネによる福音書第12章24節

苦痛への恐怖にとらわれて、死の現実から目をそらしてはなりません。死とは、神が下さった生命の謎に最も深く関わる生の究極の瞬間です。苦しみそのものには価値はありませんが、死の経験は大変キリスト教的な体験であり、神に選ばれて会いにゆくことなのです。

1995年5月

シドニー

ダイナ・マドセン

以前中絶の担い手だった友人の証言

五年前私は、中絶を専門に行なっているある病院に勤めていました。その時までには、私の心に中絶という言葉がよぎることはめったにありませんでしたし、中絶が実際にどんなものであるのか私は全く知りませんでした。それまでの私は人間の生命の神聖さなど、あまり考えたことがなかったのです。

その病院での私の肩書きは、「ヘルスワーカー」でした。そこでは様々な仕事をしました。例えば、臨床検査、集団指導（実際は中絶について嘘のことを教えること）、サポート（実際は中絶中の女性を欺くこと）、中絶医の助手などのような仕事でした。中絶医の助手の仕事には、中絶中の手伝いと中絶後に行なう収集ビンの中に赤ん坊の身体の一部が揃っているかを確認する仕事が含まれていました。私は、第二期（妊娠4〜6ヶ月）に入った胎児の中絶の際に、赤ん坊の月齢を確かめるために赤ん坊の小さな両足を手にとって壁に貼ってあるチャートと比べてみたことを決して忘れることはないでしょう。

その病院に雇われている他のみんなと同じように、私は町中の中絶反対論者のことを嘲笑し、真実に對して頑なに心を閉ざしていました。もし私が実際に起こっていることを真剣に考えれば、耐えられなくなりそうでした。それで私は、すべての問題をジョークとして扱いました。しかし、いつかしたら神が私の心に影響を及ぼすようになりました。それ

で、中絶反対論者が置き忘れていった論文や、中絶反対の書物を読み始めました。全く新しい観点から、自分がいったい何をしていたのかを見始めたのです。この赤ん坊（胎児）が人間であることに気づいたのです。中絶病院で働いていたために、ずっと長い間、感じることも考えることもすっかり忘れていましたので、私の心や頭がその事実を受け入れるのはとても大変なことでした。

中絶するたれたのでした。中絶するたに生きて人間が殺されていることを私は知ったのです。そして中絶によって母親の一部が殺されていることも間違いないと思うのです。私は病院を去り、これで私の中絶体験に終止符を打つたと確信しました。

私は神の方を見るようになり、ときどき教会に通い聖書を読むようになりました。私の生活の中にキリストを受け入れなくなっている唯一の理由が、神の姿に似せて造られた人間を殺すことに自分が関わっていることであつたと私は知りました。八ヶ月その病院で働いて、それ以上神を拒むことができなかった。神が私に中絶の醜さを気づかせてく

病院を辞めてから、私は心から神を受け入れて生話し、洗礼を受けました。何年も捜し求めた末、カトリックの教会に私が本当にいたべき場所を見つけました。私は今では優しい愛情に満ちた男性と結婚して、二人の可愛い息子たちもいます。

あの病院で勤めていたときに自分が体験したのと同じく、中絶は、妊娠中のことでした。まるで私自身が中絶を経験したかのように、中絶後に起こる様々な症状が私に起こっていたことが今になって分かります。た

だ、数多くの中絶に関わったためにずっとひどくそれを味わってしまったのです。神は長い間私の心に働き掛けました。神は私を許して、私が果たすべき仕事を私に与えてくださったので、私に自分を許してよいと教えてくださったのです。やっと、私は神の声に応える用意ができたと感じました。私は人々に向かつて話し始めました。神が私に望まれた通りのことを私はしていたのだと思います。そして、神の下僕や、神に仕える行いを悪魔がひどく嫌っていることを、私は神から警告され教えられたのです。

悪魔にひどく悩まされ攻撃されて、耐えがたい時がありました。しかし、神が私を守ってくださいり主の業が広まることを、私は確信しています。神は中絶がどれほどひどいことなのか、命がどれほど大切なものなのか私に教えてく

れました。どの胎児もみな神の子であり、だれも胎児の生命を奪い去る権利を持たないことを神は私に教えてくれました。神の許しと癒しがあることを神は教えてくれました。中絶を行なった人と中絶を受けた人々のために、中絶賛成こそ唯一の選択だと信じることができるようになることを私は祈っています。

神と共に歩むとは容易なことではありませんでした。人生は山あり谷ありで、喜びと苦悩に満ちています。しかし、神がいつも私のそばにおいていることを、私は知っています。私が想像もつかないほど神のご加護をずっと賜ってきたし、これから先もそれは変わらないでしょう。そして、求めさえすれば、神はすべての人に同じようにして下さるのです。

中絶を考えている女性

詩篇40篇1-3

私は切なる心をこめて、主を待ち望んだ。主は私の方にかがみ、その叫びを聞かれた。主はごうごうとなる穴の中から、泥沼の中から私を引き上げ、私の足を岩の上に置いて、歩みを固め、私の口に新しい歌、神への賛美をおかれた。多くの人はそれを見て恐れ、そして神に信頼した。

あとがき

ダイナの話はヤコブの「あわれみは裁きに打ち勝つ。」という言葉の生きた例です。教会は中絶は間違いだとはつきりと教えています。そして、罪を犯した人も神の慈悲によって、彼らが悔い改めるならば、必ず飲んで迎え入れられ、許されるだろうと教えています。

神はダイナに慈悲深かったのです。ダイナが永遠に「心を置き去りにすること」を神はお許しにはならなかったのです。神は彼女の心に語りかけ、中絶の不幸を彼女に教えたのです。神が彼女を教会へ迎え入れたとき、教会は喜びました。

教会は、中絶を行なっている人すべてが、中絶を受けたすべての女性が、そして社会全体が、回心するように努力しています。教会

はキリストの慈悲をすべての人に届けたいと願っているのです。ダイナのよいうに中絶の罠にかかったすべての人が神の慈悲に心え悔い改めますように。あわれみは裁きに打ち勝つのです。

中絶反対の者たちよ、決して口を閉ざすことな

れ。

(フランク・ペイボン神父による)

3

避妊の意識

忘れてならないのは、「避妊の意識」の中心にあるのは、本来なら全く自然な結果であるのに、赤ちゃんと出来るのを恐る、という事である。現在の「避妊の意識」はこの点を忘れがちである。それは未婚のティーンエイジャー達が性交するに当たって、避妊する事を許可する通俗な声とは、十代の中絶の発生を減らすという、理解できる望みに基づいているからである。しかし現在のティーンエイジャーの危機に結びついたこの問題は、元はと言えば、結婚しているカップルの、自分達の性交に実りがあるのではないかという恐れなのです。

「避妊の意識」に根づく赤ちゃんを欲しくないと、という考えがその地位を認めさせたのは、数年前にG・D・シール会社がトルコで経口避妊薬を売りに出そうとした時、という変わった出来事からだった。そこでの一番の障害は、トルコ語には「避妊」という言葉がない、という事だった。そこでトルコ人には「赤ちゃん要らない」薬として売られたのである。「避妊の意識」の中にあるあかちゃんをいらぬという考えを表わす、更にびつくりで明瞭な实例は、一九八十年の国民中絶連合会議での、モントリオールのリズ・フォルティエ先生によるものであった。フォルティエ先生は演説で、全ての妊娠は女性の生命を危うくする。」と述べ、医療の立場から厳しく見ると、「全ての胎児は中絶されるべきである。」というのである。

性行為と受胎を切り離す事で始まる「避妊の意識」は、論理的にも必然的にも、受胎を生きる事から切り離す結果につながる。国際里親連合の前医療指導者のマルコム・ボッツが一九七三年に的確に予測したように、「人が避妊に走るにつれ、中絶の率は下がるのでなく、上がる」のである、それは他の国々で起こった事を見れば、簡単に予測できる事であった。もう一つの例をとってみると、日本の調査によれば、避妊を行っている女性は、そうでない女性よりも六倍も多く中絶しているという。中絶は出来るだけ避けたいという事は、世界中が合意する事実である。

中絶を減らす方法はただ一つしかなく、それは中絶の原因を含む避妊の意識を減らす事です。そして避妊の意識を減らすには、子孫を作る事は良い事だと認め、その良い事を激しく否定する態度に立ち向かう事です。自然な子孫を作るという意味での性交

は良い事だ、という認識を持たないで、すべての人間に生きる権利があると云って、中絶を減らして真に人間らしい文明社会を作ろうとしても、あまりにも非論理的で非現実的だ、ただ単に悪いものを排除するだけでは優れた社会を保つ事は出来ないのです。基本的に優れたものを愛し大切にする事でのみ、保つ事が出来るのです。私達が人間らしい優れた社会を作るのは、昔の社会の焦げ後の炭からではなく、新しい命は素晴らしく良いものだという認識から、前向きに始まるものです。ロシアの実存主義の哲学者のニコラス・ペルダイエフが言った事は正しかった。『もし子どもを産むという事がなかったら、性でつながる二人は墮落していくだろう。』これはまさに、性交というものを卓越したレベルまで押し上げ、結婚した夫婦に自分達だけの、他の誰のものでもない対象に精神を注ぎ込む事が出来るようにする、新しい命の可能性である。

別の言い方をすれば、徳とは自然なものの完全体であるから、人々に道徳的に優れるよう教育する事によって社会に大変革を起こす事が、徳を無視して人間の悪徳を科学技術の道具を使って押え込む事のみによって同じ変革を起こすより、はるかに論理的で現実的なのです。それは徳や優れた社会が簡単に成り立つと言っているのではない。実際そうあるにはすべての人間の与えられた素質の発展と貯蓄が必要である。言いたいのは、この方法のみが論理的で現実的だという事です。道徳に無関係な科学技術による手段は、社会の非人間的な悪夢を作り出す、とはハックスレーやオーウェル達の意味深い洞察

にもあった。

本当の現実主義なら人間を見ていて、子孫を作る事から切り離された性交の喜びは、言われているような幸せにはつながらない、と気づくであろう。何故なら、性というものの中にあるルールと合致しないからである。このルールとはまるごと完全無欠で、生産的なものなのだ。お互い感じ合う性関係がどんなに満足いくものであっても、子孫を作るというドラマと神秘性が少なくとも象徴的に称賛されなかつたら、いずれその二人は失望し必ず他の人へ目を向けるだろう。自分の求める深い満足を与えてくれるだろうという密かな期待を持って。

懸念している。道義によれば、そのような反対の力は、性の持つ責任性の真意と、現在の避妊の意識の持つ悪影響とを識別するのを妨げはしないとされているが、そうするのは難しくしているのは確かである。しかし真実とごまかしとははっきりした区別は、道徳上の変革を起こすのに有効である。

ハマグリをとる漁師達が、収穫がだんだん減ってきて困った、という話がある。ひとりでハマグリを食べてしまっているからだ、と気づいたその漁師達は、ひとりでをボートに引っぱり込み、半分にちよん切つて、切断されたのを海に投げ込む、というもつともらしい解決法で応じた。しかしひとりでをちよん切ればちよん切るほど、ハマグリは減るので漁師達は困惑した。彼等の間違いは、自分の敵の持つ自然の仕組みを理解しなかつた事にある。

る。ひとでは再生する能力があるので、漁師達は実際、自分達の問題の原因を減らしていると信じながら、実は増やしていたのである。結果として、自分達が自分達の敵と化していたのである。

この話は中絶反対への比喩物語である。中絶が避妊の意識から生れるのであれば、避妊の意識を盛り上げる努力をもつとするのではなく、それを排除する事によって、現実的に中絶と戦つのです。先ず初めの一步は、敵を現実的にみきわめる事である。

Bulletin of Ovulation Method
of Australia 3/1995

助けが必要な時

障害者を持つ親として、これまで耳にして最も驚いたのは、生まれてくる前に死なせてあげることもできたのに」という意見だ。

ひとり息子さんは」と、うちの息子さんのことしか言わない人もいた。

もう成人になった息子のトッドに対する私の気持ちと、これほどかけ離れた考えはない。もつとも、複雑な驚きは多々あったけれども、まずわかつたのは、障害児の親はみな同意見だと思つが、子どもの障害が家族と社会を隔てるのではなく、障害に対する社会の偏見が高い垣根を作っているということだ。

障害児の親が、普通と全く異なる状況に直面しているわけではない。基本的には健常児の親と同じで、そこにいくつかの要素が加わる。教育・医療機関へ出向く頻度、ストレス、そして障害のあるぶん子どもへの身体的成長や向上にかけ熱意など。

息子は独立して働き、重度の知的障害を乗り越えているが、その仕事ぶりを話すと戸惑つたような表情をする人が今なおいる。息子がまだ幼く特殊教育を受けていた頃、あそこ

私はまだ若く、トッドが他の子と違い完璧ではないことを嘆きつつ、その違いを受け入れようと必死になつていた頃、教会で年配の女性と出会つた。顔を合わせるたびに彼女は息子が学校でどうしているか、私はどうかと声をかけてくれた。心優しいその方は息子を「私の愛しい天

使」と呼んで下さった。私自身そう感じた時だった。余計に嬉しかった。(なぜ彼女はその言葉をかけられたのだろうか)

格言の書16:21に「心に知恵があれば分別ある人といわれ」とある。なぜカトリック信者は他人が助けを必要としているのを見分け、障害をもつ子どもが誕生した時、その特質ゆえの孤立感や不調和を和らげる手助けができるのだろうか?それも、障害児の母親が自由に心を打ち明け、悩みさえも喜んで聞いてもらえる相手がいるとさりげなく知らせる形で。心理テストや新しい学習プログラムができたというような助言は避けよう。障害児の母はとつくに

見聞きしているはずだから。むしろその子への興味を示そう。「学校ではどう?」「先生にお会いした?」「PTAについてどう思った?」「障害児をほめ

よう。「まあ、かわいらしい髪形」「すてきな上着ね」両親も前向きな言葉を喜んでくれるだろう。あなた自身のお子さんにも、適切な表現でさまざまな障害について説明してあげよう。障害は悲劇ではなく挑戦で、障害者が生産的で前向きな生き方をしている」と説明しよう。(実生活においても、障害者専用の駐車スペースに車を停めない等の形で、障害への理解を示すことができる。)

我々障害者の母は、時には強く時にはくじけそうになるが、カトリック信者の友人の愛に支えられながら、子ども達の違いを受け入れられる家族観を築いていくことだろう。

7月

Pro Life Hero

今月のプロ・ライフ・ヒーローはオブレート会のスティーブンス・ジェラード・ルイス神父様。5月10日に66歳で突然帰天された神父様は叙階された翌年、一九五六年9月19日に日本にこられ、その後、40年もの長い間、弱い立場の人々にキリストの心を示して下さいました。11人兄弟の長男として、ベルギーに生まれられた神父様は下の弟や、妹達のお世話をよくされた方だったと伺ってました。それで、お葬式の日には遠いベルギーからご兄弟が8人参列のために来日されたのです。神父様の優しいそのお気持ちが続いて、日本でも子ども達やフィリピンの人達に心を注いで下さいました。

プロ・ライフ運動のため

にはプロ・ライフ・ニューズ」を最初は毎月400部、お身体を弱くされてからでも毎月100部、重いニューズを持って、てくてくと歩いて一人一人を訪ね、ニューズを手渡してくれました。

そして、フィリピンの方のためには英語のプロ・ライフ・ニューズを渡して下さい、生まれている子どもだけではなく、まだ生まれていないおなかの赤ちゃんまで気にかけて下さった神父様は今、お姿を見ることも、お声を聞くことも出来なくなりましたが、でも、神父様が、私達に示して下さいましたメッセージを伝える丁寧なお姿をいつまでも私達は覚えて、励みとする事が出来るでしょう。

スティーブンス神父様、安らかに眠り下さいませ。

(大岡滋子)

真の道徳的問題

「超音波撮影中に亡くなるわが子を見て、中絶論議の意味が明らかになった。」

ほとんど皆、生死にかかわる決断はどれもとても重大なものだというだろう。過去十年間、私はICU（集中治療室）で看護婦として働いてきました。そ

こで私は数多くの死を目撃し、臨終間際の人の心臓が心電図にどのように映し出されるかを見てきました。

しかしながら、私自身のつらい経験を通して、心電図が本当に生と死を決定する問題だとはつきりとわかりました。十八ヶ月の努力の末にやっと私は二人目の子を妊娠しました。私達はあの活発で元気のいい赤ん坊が動き回る様子や速く点滅するストロボライトのように心臓が鼓動するのが見えると思っただけで、産婦人科へ行く事にとても興奮して

いました。でも、そこでの出会いは息子クリスと私の最後の体験になりました。私達の未来はこの時まさに崩れようとしていました。

身体検査は想像したとおり正常でした。しかし、超音波が子どもを映し出した時、すぐにどこかひどくおかしいのに気づきました。小さな十週目の赤ん坊がまったく身動きせず

にそこにいました。その上超音波で内部の構造が透けて見えるので、私達全員その小さな心臓が苦しむように鼓動しているのを眼のあたりにしたのです。心拍数は最初20〜40でひどく不規則でした。私達は心拍の間隔がしだいに長くなっていくのを共に悲しい気持ちで黙ってじっと見守っていた

ました。赤ん坊の心臓の心房と心室がかわるがわる収縮しているのまで見る事ができました。そしてまた赤ん坊がじっとしているので、小さな腕、指、足

つまさき、目、鼻、口などその小さい身体のすみずみまではつきりと見る事ができたのです。今にも止まってしまいそうな心臓、それは私には本当によく知っている見覚えのあるものでした。これがお腹にいる私達の赤ん坊の死でした。そして、実際に私達はこの目でそれを見たのです。

医師は気の毒がり、それと同時にすっかり驚いていました。彼はいままでも何年も診療してきたけれど、一度も超音波撮影中に胎児が死ぬのを見た事がなかったのです。彼は「こん

なのを見るのは本当に滅多にありません。」と言いました。と、いうのは、もう2、3分早かったら心臓は正常に動いていたでしょうし、逆にあと2、3分遅ければ心臓は完全に停止していたでしょうから。そうすれば私達は死んでしまつて動かない子どもを見ていたでしょう。

この超音波は私の人生で最も鮮明でつらい思い出の一つになっています。その当時私は、「なぜ私達は我が子がお腹の中で死ぬ姿を実際に見なければならなかったのだらう。」と自分に問い続けました。

しかしその間に、そしてそれ以来何度も、ある一つの考えがひらめき、心の中であふれ続けています。私達が心引きさかされるような思いで見たあの出来事は、子どもの生まれつきの原因でおこつた物でしたが、それは何の罪もない子に襲いかかる中絶のむご

たらしさとまつたく同じなのです。この事は女性の権利についてあれやこれやと考えているようなあいまいな政治問題ではないのです。これは本当に生きた赤ん坊に関わる真の道徳問題なのです。このことに関して私自身が証明できます。

神様、以前、生と死にかかわる事柄に私がひとりよがりだった事をお許し下さい。そして、眠れる大衆に私達の間で行なわれている殺人を気づかせて下さい。

Mpls ProLife News 9/94

「あきらめないで！神のおぼし召しを待ちなさい。」

たくさんの方が経験していることだと思いが、私も長い間不妊に苦しんでやっと最初の子どもを授かり、二番目の子どもを授け、さらには四年待ちました。三番目の子どもになると、さらに8年も待ちぼうけでした。

不妊症の女性がどんな思いでいるか私にはわかりません。妊娠するように努力する日々の苦しみ。そしてその度にだめだったと絶望感にひたる、周りの女性が妊娠していくのを見ると、自分の腕の中はからっぽだという思いが募るのです。

神様が子どもを授けて下さるのには理由があると思います。同じように、なかなか子どもが授から

ず長い間待たされるのも、

神様のお考えによるものなのです。子どもを望むということは、喜びとともに全ての責任、義務、そして悲しみを受け入れるという事です。そのときに神様が「だめだ」「今はその時期じゃない」とおっしゃるのなら、その言葉を信じて

ことです。もしかしたら、重い障害のある子どもをお授けになる心づもりが

おありになって、まだ私達にはその資格がないとお考えになっているのかもしれない。もしかしたら、私達は辛い日々を送ることになるかもしれず、今の私達には荷が重すぎるとお考えになつていて、

いた時、その子がかんしゃく症であるとは思って

いませんでした。13歳になつた今でも、その子は絶え間ない親の愛情を求め続けてきて、あらゆる忍耐を強いられます。おそらく、神様は、私にはまだそんな要求に耐えられるような精神力がないとわかつてらしたので、私が成長するのをお待ちになつたのでしょう。三番目の子どもも欲求の強い子で、九ヶ月になつても夜中に何度も目を覚ましては母親の愛情の「グラム」までも求めてきます。

私が不妊症の女性に一言アドバイスするとしたら、それは「辛抱強く待ちなさい」ということです。神様のご意志がいつか達せられることを祈って、神

様の判断を信じなさい。「いいだろう」とおっしゃった時、神様は家族の他の人に対するのと同じようにその子の世話をするだけの強さをあなたに与えてくれるはずですよ。

CCL family foundations

11-12/95pp16



「死の文化」を打ち破るために書かれた

「命の福音書」

ローマ法王ヨハネ・パウロ二世は、最近出した回勅は中絶や安楽死のような行為を正当化しようとする「死の文化」を打ち破る目的で書いたものであると述べました。

昨年の三月三十日に出された回勅で、教会は、生まれようとして生まれる

前であろうと、健康であろうとなかろうと、若かろうと年をとっていようと、すべての人間の命は尊いものであることを明示することを望んでいます。

「命の福音」と題された回勅は、バチカンの高官によって、記者会見の席で明らかにされました。法王は、教会や善意をもつ人々が中絶反対闘争において劣勢にあることを憂慮し

て、回勅を書いたと述べました。法王はすでに一九九一年に、回勅を書く意志を表明していました。世界の平和や、人権、貧困、飢餓に関して成果の兆しがあるけれども、重大な敗北もあつたと法王は述べました。

「今なお世界の各地を血で染めている同民族間の内戦や、弱い者に対する暴力のみならず、とりわけ胎児の今や、老人や末期の病人に対する攻撃に見られるような、憂慮すべき『死の文化』が広がっています。」と法王は述べています。

「中絶を正当化したり、安楽死に関する要求が増大することは『命の文化』の敗北を表しているので

す。私が回勅で伝えたいことは基本的なこと、すなわち人間の命は尊いもので、神のみが命を支配するものであるということなのです。」と法王は述べています。

「このことは、人が肉体的、人種的、社会的に、どんな立場にいようと真実なのです。すでにこの世に生まれている人も、胎児も、健康な人も、障害のある人も、病気の人も、老いても、若きも、どんな境遇にいても、すべてに人の命について言えることです。命を尊ぶという根本原理が弱体化するたびに、社会の調和や、民主主義や、真の平和の基礎が脅かされているのです。」と、法王は述べています。

法王は聖書を手元に置いて、この回勅を書いたと述べています。命を脅かすものは最近のものだと思われませんが、法王の主張は全て旧約、新約聖書の中に書かれているような善悪の基本概念に通じているのです。法王は、カインとアベルの物語、エジプトの王ファラオがヘブライ人の最初生まれれた男の子を殺害する話、聖書における年長者に対する尊敬と敬意の話、外国人や未亡人や孤児や病人や貧しい人や胎児の命に対する脅威がある場合に彼らの命を守ることを例に挙げて述べています。法王はマタイ伝を引用して、善が悪と呼ばれ、悪が善と呼ばれるときは、すなわち個人の良心が道徳的盲目への途上にあると述べています。

おそらく、この回勅とその中絶反対行動への訴えの中に流れているのは何よりも聖書の明快な口調

でしょう。法王自身が目指す自らの姿として取り上げたと思われる文章で、彼は、『聖パウロがテモテにあてた手紙』の中の「みことばを述べ伝えなさい。時が良くても悪くても全力を尽くしなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」という言葉を引用しています。